

p94-95(生産資本の循環)一般定式は「 $P \cdots W' - G' - W \cdots P$ 」

- ・生産資本の周期的に更新される機能、価値増殖に関係をもつ再生産過程としての生産資本の生産過程を意味する。
- ・周期的再生産、出発点自体によって再開始が与えられている。
- ・第一に、第1形態(貨幣資本の循環、 $G \cdots G'$)では生産過程($A - P_m$)が媒介になっていたが、ここ(生産資本の循環-第2形態、 $P \cdots P'$)では流通が媒介となる。
- ・第二に、総流通は、第1形態の $G - W - G$ に対し第2形態は $W - G - W$ と正反対の形態をとる。

第一節 単純再生産

①結論…(p101-8L) 単純再生産 = $g - w$ が $G - W$ から全く分離されること

生産資本の機能は剰余価値の生産であるが、剰余価値(g)が資本価値(G)と分離して循環するかどうかで、循環の性格(単純再生産か拡大再生産か)が決まる。

g が資本家の収入となり個人的消費に支出され、資本の流通とは別個の軌道を描くのが単純再生産である。

※図解優先で… p110-(生産資本の循環)定式を明細にした形態は

$$P \cdots W' \left(\begin{array}{c} W \\ + \\ w \end{array} \right) - \left(\begin{array}{c} G \\ + \\ g \end{array} \right) - W - (A, P_m) \cdots P$$

※以下本文

p97-98

②「 $g - w$ 」は、資本家の支出する貨幣を介しての「一連の買い」である。

- ・貨幣は…当座の消費に向けられた予備金、退蔵貨幣形態にある。
- ・500ポンドの価値を持つ一万封度(ポンド)の糸… w (1560封度の糸) - g (78ポンドの貨幣)

p99-

③「 $w - g - w$ 」は、単純な商品流通である。

- ・「 $w - g$ 」は、商品資本の流通 $W' - G'$ に、したがって資本の循環に含まれている。
- ・「 $g - w$ 」は、この循環から分離された一般的商品流通行程として、循環の外で行われる。
- ・「 $W - w$ 」(資本価値と剰余価値との流通)は、 W' の G' への転化の後に分裂する。

p101-103

④俗流経済学の過ち…「資本家が商品を生産するのは別の使用価値をもつ商品と代置または交換するため」と考える。

⑤資本家の収入としての「 $w - g - w$ 」は、 w が商品資本というその機能形態にある資本 W' の価値部分であるかぎりでのみ資本流通に入る。

しかし「 $w - g - w$ 」として独立化されるや否や、資本家によって前貸しされた資本の運動には入らない。

- ・貨幣は铸貨としてのみ機能する。
- ・この流通の目的は、資本家の個人的消費である。

⑥ p104-前図の「補足段階に入る」

$$\text{総流通は} \quad \begin{array}{c} A \\ W - G - W < \\ P_m \end{array}$$

※補足段階… $G - W - (A, P_m)$

・第一に、貨幣資本Gは、第一形態（ $G \cdots G'$ なる循環）では、資本価値が前貸しされる本源的形態として現れた。ここでは初めから、商品資本が第一の流通段階 $W' - G'$ で転化された貨幣額の部分として現れる。

p106-107

・第二に、(上記)「総流通」では、同じ貨幣が二度位置を変える。資本家はまず売り手としてそれを受け取り、それから買い手としてそれを手放す。

・第三に、その機能はWをAとP_mに換えること、…商品資本の生産資本への再転化を媒介するにすぎない。

p110-前記「明細の図」

・貨幣資本の生産資本への転化は、商品生産のための商品購買である。

※(恐慌の考察に關しての重要な点)??

p111- (俗流) 経済学者たちによって、過剰生産なるものはありえないという証明に用いられる。

・(後 3L) 恐慌の考察に際して、重要な一点である。

p113-6L そこで恐慌が始まる。恐慌が明瞭になるのは、消費的需要、すなわち個人的消費のための需要の直接の減少においてではなく、資本対資本の交換の減退、資本の再生産過程の減退においてである。

※(解説)

・生産資本Pの機能として生み出された W' は、 $W' - G' \cdot G - W$ を通じて再び生産資本に転化することによって循環は順調に進行する。しかしこの再生産は、 W' に表わされる個別資本の再生産過程の外部にある多くの再生産過程(社会的総生産)によって制約(前提)されている。資本の循環が順調に進む限りで、資本の循環の外部にある労働力の再生産のための労働者の個人的消費や、資本家自身の個人的消費もまた問題なく果たされるのである。これは「恐慌の考察に際して重要な一点」である。

・個別資本にとっては、生産された商品 W' が販売され、貨幣に転化しさえすれば、この商品が生産的または個人的消費に入り込まず、商人の手に滞留したとしても、問題はない。この個別資本の循環は進行することができるし、生産を拡大することもできる。こうしたカラ消費の下での再生産過程全体の繁栄は、現実には売れないままの商品が市場にあふれることを意味し、そのまま支払期限が到来すれば、支払いのためだけの販売競争がおき、恐慌が勃発する。

つまり、 $W - G - W$ による再生産の媒介といっても、個別資本に限定されているのであって、社会的再生産の現実的關係をそのまま表現してはいないのである。

・貨幣資本は商品生産の生産資本への再転化を媒介するが、流通過程そのものの必要から、あるいは外部的事情によって、自発的、非自発的に流通から引き上げられ、退蔵貨幣の形態をとる。退蔵貨幣も、循環の関連によって規定されるのであるから、それは貨幣資本の一機能であり、遊休的潜在的な貨幣資本の形態なのである。

・生産資本の循環を論じつつ、恐慌(あるいは循環の攪乱)について言及している点。

マルクスは事態を純粹に考察するために、たびたび循環が正常に進むという前提で論じつつ、他方でそれが必ずしも社会的再生産の現実を反映したものではなく、攪乱の契機が潜んでいることを示唆しています。もちろん、恐慌を正面から論じているわけではありません。しかし販売と購買の分裂・分離の中に「恐慌の最も抽象的で一般的な可能性」があるとの考察が、資本の循環にまで論を進め、個別資本と社会的再生産の關係の中で、その可能性をより具体的で現実的なものとして論じているのではないかとの意見。

p115-実現された剰余価値は、資本化を予定されていても、…過程進行中の資本価値の循環に入る大きさに機能しうる大きさに、…いくつかの循環の反復によって初めて成長しうる（※積み立てが必要）。→退蔵貨幣、潜在的貨幣資本を形成する。

この貨幣退蔵は、資本主義的蓄積過程に含まれる…

p116-貨幣が支払い手段として機能するならば、資本化を予定された剰余生産物は、貨幣に転化されるのではなく…債権に、所有名義に転化される。

p117-定式を複雑にしないためには、剰余生産物が蓄積されるものと仮定する。

→すると生産資本の循環（拡大再生産）の定式は以下ようになる。

$$\begin{array}{c} A \\ P \cdots W' - G' - W' < \cdots P' \\ P_m \end{array}$$

…その第二の循環を開始する。

p118-119

- ・ P' は第一の P' はよりも大きい生産資本である。
- ・ P' が表現していることは、剰余価値が生産されたということではなく、生産された剰余価値が資本化され、したがって資本が蓄積されたということであり、
- したがって P' は、P' とは異なり、元来の資本価値に、この運動によって蓄積された資本の価値を加えたものからなる

p121-122 下記図式の段階では

$$\begin{array}{c} A \\ G' - W' < \cdots P' \\ P_m \end{array}$$

- ・ 膨張した大いさは W' によってのみ示される。
- ・ (大きさを)「A' と P m'」という記号で示すのは誤り。

◎資本の増大には資本の価値構成の変化が結びついていて、この変化の進行とともに P m の価値は増大するが、A の価値は、絶えず相対的に減少し、しばしば絶対的にも減少するからである。